

News Letter

Vol.10

2025年
7月3日発行



実験室の風景



<https://www.infront.kyoto-u.ac.jp/>

新しい拠点事業

4年目を迎えて

所長よりご挨拶

ウイルス研究所と再生位科学研究所が統合してウイルス・再生医科学研究所になったのが2016年10月ですから、すでに9年近く経ったこととなります。統合した時点ではどちらの研究所にも拠点事業があって、統合後もそれぞれの拠点はしばらく独立して継続することとなり、1研究所2拠点の体制で事業を進めてきました。

名称を医生物学研究所に変更したのが2022年4月です。この新研究所名には、「生物学」という言葉が入っている事からわかりますように、「生物学としての視点を大事にしよう」という思いが込められています。

名称変更を契機として、それまで2つに分かれていた拠点事業も統合することになり、それ以後は1つの「ウイルス・幹細胞システム医生物学共同研究拠点」として運営しています。

この拠点の中核となる事業として、当研究所の教員スタッフとの共同研究を広く公募し、採択された課題には100万円を上限として支援する仕組みを始めました。2023年度は32件、2024年度は34件、そして今年度（2025年度）には33件が採択されました。

拠点活動は、「施設、設備、材料、データ、資料などを他の機関に提供し、共同研究を推進するシステム」というのが基本的な方針です。しかし、本拠点の活動はさらに大きな意味を有しています。医生物学研究所への改称に伴う新拠点の活動には、「研究所の方向性を指し示す大事な活動」という役割を期待しているからです。

今年度採択された33件の共同研究のそれぞれが大きく発展することを、期待しています。

河本 宏

(京都大学医生物学研究所 所長)

キックオフミーティング終了後の意見交換会
左端より、縣保年教授（滋賀医科大学）・
童友さん（生命科学研究所）・筆者



拠点からの重要なお知らせ

謝辞記載の お願い

本研究所の拠点事業による研究成果を論文等で発表する際には、**当該論文の謝辞の欄に、本研究所の共同研究による旨を下記の通り付記していただきますようお願いいたします。**
“This work was supported by the Cooperative Research Program (Joint Usage/Research Center program) of Institute for Life and Medical Sciences, Kyoto University.”
 大変お手数をおかけいたしますが、ご協力お願い申し上げます。

拠点長よりご挨拶

皆さま、拠点長の朝長です。梅雨入り間近の6月、京都ではインバウンドもひと段落し、街が少し静かになりました。窓から見える清水寺の三重の塔も、新緑の中で雨に霞んだ姿が落ち着いた雰囲気醸しています。さて、「ウイルス・幹細胞システム医生物学共同研究拠点」もおかげさまで4年目を迎え、活動がますます充実しています。先日5月16日に開催したキックオフミーティングでは、今年度も多くの研究者にご参加いただき、特に若手研究者の新鮮な視点や意欲に刺激を受けました。海外からの参加も増え、多様な分野の融合や国際共同研究など、新たな展開が生まれる予感があります。



キックオフミーティングにて

当拠点では、クライオ電子顕微鏡をはじめ研究環境の整備や支援体制のさらなる強化を進め、皆さまにより一層活用いただける場を作っていきたいと思っております。引き続き拠点の発展に向けて、どうぞよろしくお願いいたします。

朝長 啓造

(ウイルス・幹細胞システム医生物学共同研究拠点 拠点長)

刺激的なミーティング —初めて本拠点に参加して—

2025年5月16日（金）、ウイルス・幹細胞システム医生物学共同研究拠点キックオフミーティングおよび懇親会に参加させていただきました。この度、物質・細胞統合拠点の鈴木研究室に所属し本共同研究に関わる身として、本ミーティング・懇親会に参加した感想をまとめさせていただきます。

ウイルス・幹細胞システム医生物学共同研究拠点では、「ウイルス感染研究」「幹細胞・組織再生研究」「生命システム融合研究」の3テーマから共同利用・共同研究課題の公募が行われており、鈴木研究室はそのうち「生命システム融合研究」分野にて課題を採択いただきました。キックオフミーティングでは、今年度採択された33課題の研究代表者による口頭発表が行われ、私は研究代表者代理という形で発表させていただきました。口頭発表5分、質疑応答5分という限られた時間ではありましたが、各課題に対して様々な議論が交わされ、濃密で有意義なものであったと思います。特に、分野の垣根を越えた視点からの質問も多く、各出席者が純粋にサイエンスを楽しんでいる心地よい雰囲気があったように思います。このように、「生命科学の理解」という共通目的を持ちながらも、専門性の異なる方々がこれほど多数かつ多様に集まるのは、拠点の特色だと感じました。私にとって新鮮な環境であったため、「この分野の方は、こういった点を興味深く感じるのだな」と、自身の研究を、新たな角度から面白さを発見できるいい機会となりました。

また、私が関わる研究課題では、鈴木研究室の細胞脂質分布に関する知見をベースに、医生物学研究所の新宅研究室の

塩見先生が開発された膜張力・トランスクリプトーム解析技術を応用することが柱になっております。同じように、キックオフミーティングで拝聴した他のどの研究課題も、各研究室の専門性や強みを活かし、協働して研究目的の達成を目指す姿勢が印象的でした。多様な研究者が手を取り合い、最先端の研究を切り開こうとする熱意と前向きな空気が満ちており、刺激的なミーティングでもありました。

ミーティング後は医学生研1号館エントランスにて、懇親会が行われました。おいしい軽食と飲み物をいただきながら、他の研究代表者の方々や関係者の皆さまと言葉を交わし、和やかな雰囲気のなかで交流のひとつを過ごしました。その中で、河本先生と縣先生からは、今後の研究活動について励ましの言葉をいただき、心強く感じました。また、北島先生とお話しする中で、本感想文執筆のお声がけをいただきました。こうして直接お話しできる機会を通じて、新たなつながりが生まれ、医学生研とのご縁がさらに深まっていくのを感じ、懇親会に参加して本当に良かったと思っております。

改めて、このたびは研究課題をご採択いただき、誠にありがとうございました。本共同研究を通じて、新たな視点や技術が加わり、自身の研究がさらに発展していくことを楽しみにしております。



童友

(京都大学生命科学研究科博士課程3回生 鈴木淳研究室)

医生物学研究所の魅力

2025年4月より医生物学研究所兼白眉センターの特定助教として着任いたしました、小原乃也と申します。ニュースレターに記事を寄稿できる貴重な機会を頂きました編集長の北畠先生に感謝申し上げます。私はこの度新所員として医生研に加わらせて頂きましたが、実は学部生のころから廣田圭司先生、近藤玄先生のご指導の下、約10年の間医生研で研究をさせて頂いております。その中で、私が医生物学研究所の“ここがすごい”と思う部分を是非この機会に紹介させて頂ければと思います。

① 動物実験施設

動物施設4号館 SPF 施設は近藤玄施設長、助教の渡邊さんと職員の竹中さん・俣野さん・渋谷さん・北澤さんが担当されている施設です。3号館は主に職員の宮地さん・北野さん・吉田さん・出口さんが担当されています。このようなメンバーのもと、通常の運営やマウスのクリーンアップ業務のみならず、体外受精による系統の掛け合わせやコロナー拡大、遺伝子改変マウスの作成まで請け負って頂けます。特に、抗インヒピン抗体による過剰排卵によって少ないメスマウスからたくさんの産仔数を得るという技術は大変すばらしく、論文執筆に必要なマウス（特に低確率で生まれる多重改変マウスなど）を得るのに何度も助けて頂きました。また、近藤先生・渡邊さんのもとには、遺伝子改変マウスの作成方法のノウハウはもちろん、遺伝子改変マウスのコンストラクトの作成のコツに関する“秘伝のタレ”が存在し、“正しくワークする”遺伝子改変マウスの作出をご支援頂けます（私の学位論文もまさにこれらのノウハウのおかげで形になりました）。さらに、3号館には、P2施設やP3施設があり、感染実験が可能になっています。微生物と免疫の研究を行っている私にとってはこのような環境で研究を行えることは大変ありがたい限りです。

② 共通機器

医生物学研究所にある様々な共通機器も魅力の一つです。なんと、セルソーターのAriaが2台、SONYが2台あり、免疫学を研究している私にとってこれほどの安心材料はありません（ソーターはよく壊れるので複数台あるとどれかが使えて安心です）。また、共焦点顕微鏡のSP8やキーエンスのオールインワンの顕微鏡、ELISAのプレートリーダー（384 well plateも使えます）、Cyto-

spin, Covaris…などなど挙げればきりがありませんが、医学研究科の共通機器も合わせるとほとんど実験には困らないと思います。さらに、共通機器委員長の新宅先生を始めとした共通機器委員会の先生方のご尽力によって、新しい機械の導入や、所内の使用可能な機械の整理が進められており、今後のアップデートも大変楽しみです。

③ 気軽に議論できる環境

近年の医生研は風通しがよく、他のラボでどのような研究がおこなわれているかが大変わかりやすくなっていて、議論も活発であると感じております。河本所長によるリトリートや松浦さんが企画されたLiMe happy hour、また毎週金曜日に開催されるLiMeセミナーによってより交流が盛んになり、分野を超えた議論が展開されています。実際に、私個人としましてもリトリートの2日間で所内で新しく3件の共同研究にお誘いいただきまして、現在も継続中です。医生研には様々な分野の研究者が集まっているため、様々な視点を持った研究者のアドバイスを頂くことができます。他のラボの研究者の発表を聞いて、“その問いはこの系を使えば解決できそうです！”、“こんな系があるのですが、そっちのフィールドで面白いことできませんか？”などのDiscussionに発展し、そこから研究が飛躍的に進むこともあるのではないかと思います。例えば、私の専門は免疫学ですが、免疫学の基本的な技術（細胞を分類・分取する）を使って精子を解析すると、精子には複数の細胞集団が存在し、主に受精をする精子集団だけでなく受精を負に制御する精子集団も存在するという極めて興味深い知見が得られました（Watanabe et al., 2024, BioRxiv、渡邊さん・近藤先生・中馬先生との共同研究）。私はまさにこのようなExcitingなコロナーポレーションを所内で推進し、医生研を盛り上げる一助になればと願っております。何か面白いネタを持っている方は是非Discussion頂けますと幸いです。今後とも何卒よろしく申し上げます。



小原 乃也

京都大学医生物学研究所
兼 白眉センター 特定助教



新たな共同研究のご紹介

1

ウイルス感染研究

日本大学文理学部生命科学科 准教授 黒田 大祐 博士

▶ ウイルスに対する中和抗体理論設計のための分子基盤の構築

長崎大学熱帯医学研究所 准教授 高松 由基 博士

▶ エボラウイルスの転写・複製型のヌクレオカプシド形成機構の解明

東京科学大学総合研究院 難治疾患研究所 教授 豊島 文子 博士

▶ α -アンチトリプシンC末端ペプチドによるウイルス感染抑制機構の解析

神戸市健康科学研究所第2衛生研究部 副部長 森 愛 博士

▶ エンテロウイルスのゲノム多様性と宿主感染・複製機構

2

幹細胞・組織再生研究

大阪大学微生物病研究所 教授 山崎 晶 博士

▶ 新規自然免疫型T細胞の分化及び機能の解析

岡山大学学術研究院医歯薬学域（医学系）組織機能修復学分野 教授 實田 剛志 博士

▶ ヒト多能性幹細胞技術と細胞内分岐鎖アミノ酸可視化技術によるがん発症・進展機構の理解

3

生命システム研究

University of California, San Diego Distinguished Professor Cornelis Murre

▶ The assembly of 3D nuclear architectures in hematopoiesis

東京大学定量生命科学研究所 病態発生制御研究分野 助教 羽田 政司 博士

▶ 男性不妊症の診断応用に向けた、精子DNA切断領域の同定

九州大学大学院工学研究院 准教授 Kim Jeonghyun 博士

▶ 三次元培養モデルを用いた骨細胞のメカノトランスダクション機序の解明

University of Illinois Urbana-Champaign Assistant Professor Polly Yu

▶ Identifying network motifs for responses of chemical reaction networks

HTW Berlin, FB2, Life Science Engineering Professor Carsten Conradi

▶ Efficient multistationarity conditions for networks of intracellular signaling

金沢大学ナノ生命科学研究所 教授 新井 敏 博士

▶ FLIM型バイオセンサーを用いた分岐鎖アミノ酸の定量マッピング

東京大学大学院薬学系研究科・衛生化学教室 特任助教 近江 純平 博士

▶ 赤血球の力学特性における膜リン脂質組成の意義の解明

KTH Royal Institute of Technology, Department of Gene Technology Group Leader, Docent (eqv. associate professor) Ian Hoffecker

▶ Spheroid spatial sequencing with DNA barcode networks and droplet fluidics

京都大学高等研究院物質-細胞統合システム拠点 教授 鈴木 淳 博士

▶ ELASTomicsを用いた細胞膜脂質非対称性変化と遺伝子発現制御の解明

京都大学白眉センター 特定准教授 猪瀬 朋子 博士

▶ プラズモニックナノワイヤーを用いた力学的拘束に起因する休眠がん細胞の代謝過程解明

University of Florida Assistant Professor Kotaro Fujii

▶ Developing tRNA and mRNA (TandM)-Ribo-seq Monitoring tRNA mis-decoding

大阪大学大学院医学系研究科麻酔集中治療医学教室 教授 吉田 健史 博士

▶ 肺障害（急性呼吸促進症候群、ARDS）における機械受容体PIEZO2感覚神経の寄与の解明

お知らせ

【医研のイベント】進学説明会を開催しました

4月19日（土）に、医生物学研究所進学説明会を開催しました。

河本所長による研究所紹介から始まり、合計10分野による研究室紹介を行った後、研究室訪問として各研究室を見学していただきました。



研究室紹介の様子

新所員講習会および歓迎会を開催しました

4月18日（金）に、京都教育文化センターにて新所員講習会および歓迎会を開催しました。

講習会には約70名の新所員が参加しました。その後の歓迎会では新所員の自己紹介が行われ、和気あいあいとした会になりました。



歓迎会の様子

拠点キックオフミーティングを開催しました

5月16日（金）に、ウイルス・幹細胞システム医生物学共同研究拠点キックオフミーティングを開催しました。

当研究所では「ウイルス感染研究」「幹細胞・組織再生研究」「生命システム融合研究」の3テーマについて共同利用・共同研究課題を公募しています。今回は、今年度採択された33課題の関係者が参加し、研究代表者による口頭発表が行われました。

また、終了後には交流ラウンジにて意見交換会を開催し、交流を深めました。



ミーティングでご挨拶する朝長拠点長

関連リンク

ウイルス・幹細胞システム医生物学共同研究拠点【令和7年度採択一覧】
<https://www.infront.kyoto-u.ac.jp/kyoten/01-list-r7/>



医生物学研究所のウェブサイトを更新しました

今春、医生物学研究所のウェブサイトを更新しました。

イベント開催のお知らせや研究成果を、一目でわかりやすく掲載しています。

また、共同利用・共同研究拠点のページも刷新を行い、拠点のご案内動画をはじめとするコンテンツを掲載しております。ぜひご覧ください。

関連リンク

医生物学研究所
<https://www.infront.kyoto-u.ac.jp/>



共同利用・共同研究拠点

<https://www.infront.kyoto-u.ac.jp/kyoten/>



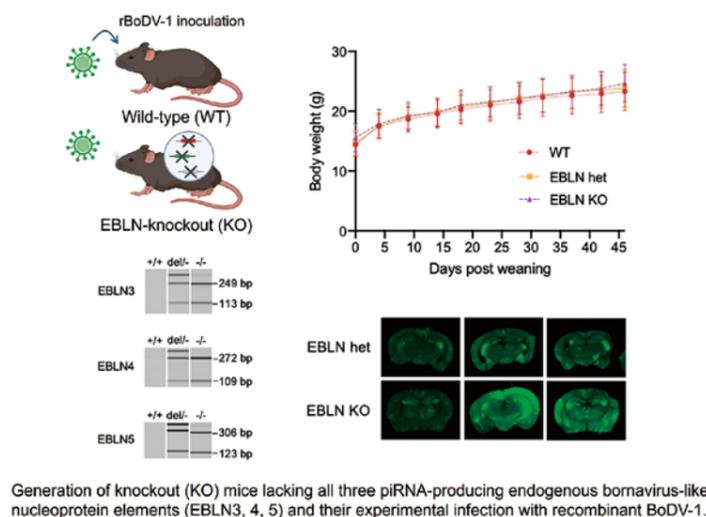
2025年5月30日

内在性ボルナウイルス配列 (EBLN) ノックアウトマウスを用いたボルナ病ウイルスの脳内感染防御メカニズムの解析

~EBLN由来piRNAおよびIFN- γ /TLR7経路の抗ウイルス活性を解明~

朝長啓造教授と Nicholas Parrish 博士 (理研生命医学研究センター) の共同研究により、人獣共通感染症であるボルナ病ウイルス1型 (BoDV-1) に対する宿主防御機構が明らかにされました。研究チームは、さまざまな遺伝子を欠損させたマウスを用いて BoDV-1 感染モデルを構築し解析を行いました。その結果、自然免疫に与える TLR7 および IFN- γ 経路が、BoDV-1 の脳内複製を抑制する上で不可欠であることを実証しました。一方、進化の痕跡として知られる内在性ボルナウイルス配列 (EBLN) 由来の piRNA による抑制効果は限定的であることが示されました。特に TLR7 の役割が強く示唆され、BoDV-1 感染制御の主因である可能性が明らかになりました。この成果は、BoDV-1 に対する中枢神経系の免疫応答の理解を深め、EBLN の生理的意義を再評価する手がかりとなります。

[DOI] <https://doi.org/10.1371/journal.ppat.1013165>

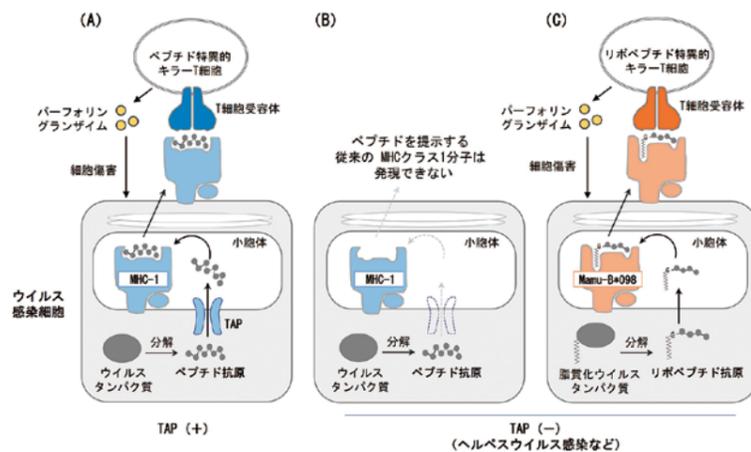


2025年5月15日

リポペプチド提示MHCクラス1分子はペプチド輸送体TAPを必要としない新しいキラーT細胞応答を誘導する

ウイルス感染細胞内で産生されたウイルスタンパク質は分解され、TAP を介して小胞体内に運ばれた後、MHC クラス I (MHC-I) 分子により細胞表面に提示されます。この経路は CD8 陽性キラー T 細胞の活性化に必須であり、TAP が欠損すると MHC-I の提示が行えず、T 細胞数が著しく減少します。一方、近年、脂質化ペプチド (リポペプチド) を提示する新しい MHC-I サブセットが発見され、これらは TAP 非依存的に細胞表面に発現できることが分かっていました。森田大輔助教らの研究グループは、リポペプチド提示能をもつ Mamu-B*098 を導入したトランスジェニックマウスを TAP KO マウスと交配し、この MHC-I 分子が TAP 非依存的に CD8 陽性 T 細胞を回復・活性化させることを見出しました。誘導された T 細胞はリポペプチド特異的に反応し、標的細胞を傷害しました。本研究から、リポペプチド免疫は TAP を欠く環境でも有効に働き、免疫から回避しようとするウイルスや腫瘍に対する新たな免疫戦略となる可能性が示されました。

[DOI] <https://doi.org/10.1093/jimmun/vkaf082>

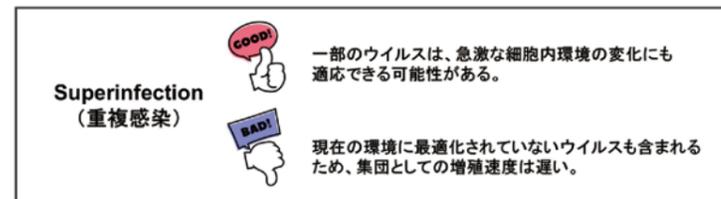
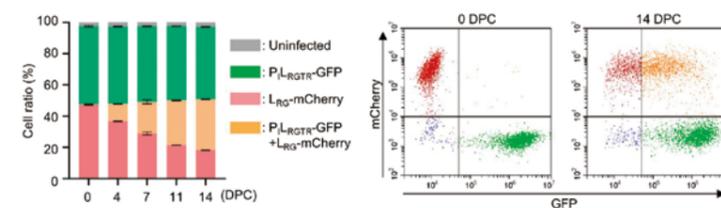


2025年5月1日

ボルナ病ウイルス2は重複感染によって遺伝的多様性を維持することを解明

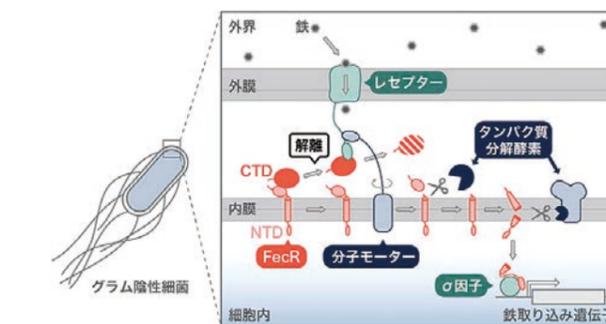
朝長啓造教授らの研究グループは、ボルナ病ウイルス2 (BoDV-2) のゲノム情報を解析し、ウイルスの RNA ポリメラーゼ遺伝子に複数の1塩基多型が存在することを発見しました。多くのウイルスではウイルスの増殖に不利な表現型は淘汰され、有利な表現型のみが生き残りますが、BoDV-2は複数の表現型のウイルスが一つの細胞に重複感染 (superinfection) することで、複数の表現型のウイルスが集団で生き残ることを明らかにしました。これは、BoDV-2が特定の環境に適した表現型を選抜するのではなく、様々な環境に適応できるように集団として生き残る戦略を採用している可能性を示唆しており、ウイルスと宿主の共進化を紐解く手掛かりになることが期待されます。

[DOI] <https://doi.org/10.1038/s44298-025-00117-w>



2025年4月24日

細菌が環境中の鉄の存在を「知る」しくみを解明 膜タンパク質の多段階切断を介して、細胞外の情報が細胞内へ伝達される



秋山芳展 教授と岐阜大学の横山達彦 助教・久堀智子 准教授らの研究グループは、奈良先端科学技術大学院大学と理化学研究所との共同研究で、細菌が環境中の鉄イオンを感知する分子メカニズムを解明しました。細菌は鉄を取り込む際に、分子モーターが生み出す機械的な力を利用することが知られています。本研究ではこの力が、情報伝達を担う膜タンパク質「FecR」にも伝わり、FecRの連続的な切断を引き起こすことを突き止めました。そして、こうして生じた FecR 断片が、鉄の取り込みに必要な遺伝子群の発現を誘導することを明らかにしました。本成果は、タンパク質切断を介した情報伝達の新たなメカニズムを提示し、生体機能制御の基盤となる仕組みの一端を明らかにしたものです。

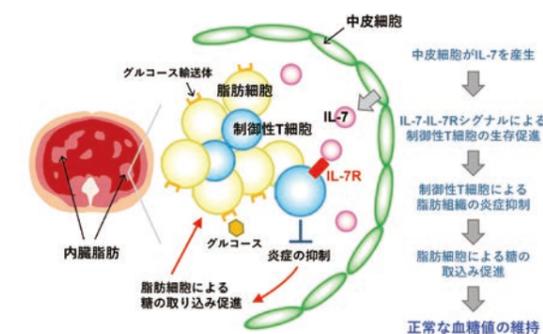
[DOI] <https://doi.org/10.1073/pnas.2500366122>

2025年4月7日

制御性T細胞のIL-7受容体は2型糖尿病抑制に必要である 一内臓脂肪における制御性T細胞の維持機構を解明

生田宏一 医学研究科特任教授 (兼: 医生物学研究所連携教授) らの研究グループは、内臓脂肪に存在する制御性 T 細胞 (Treg) の生存維持にサイトカイン IL-7 の受容体 (IL-7 receptor: IL-7R) が必要であり、内臓脂肪で産生される IL-7 が 2 型糖尿病を抑制するために重要であることを発見しました。本研究成果は、将来、2 型糖尿病の治療薬開発につながることを期待されます。

[DOI] <https://doi.org/10.1093/jimmun/vkae064>

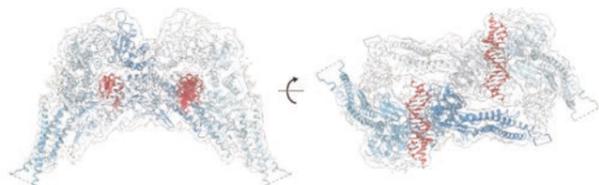


2025年4月1日

狂犬病ウイルスが標的とする、四量体pY-STAT1の構造を初めて解明 ~STATファミリーに関する新知見の提供および狂犬病に対するワクチン開発の貢献に期待~

杉田征彦 准教授、北海道大学の尾瀬農之 教授ならびに前仲勝実 教授らの研究グループは、活性型転写因子・リン酸化STAT1 (pY-STAT1) の四量体構造を、クライオ電子顕微鏡法により世界で初めて明らかにしました。これにより、STAT が多量体を形成してDNAに結合するという新たな分子機構が提唱されました。本研究は、病原性ウイルスによる宿主免疫応答の抑制機構に対する理解を深め、弱毒狂犬病ワクチンやSTAT阻害ウイルスタンパク質を標的とする抗ウイルス薬の開発に資すると期待されます。

[DOI] <https://doi.org/10.1126/scisignal.ads2210>

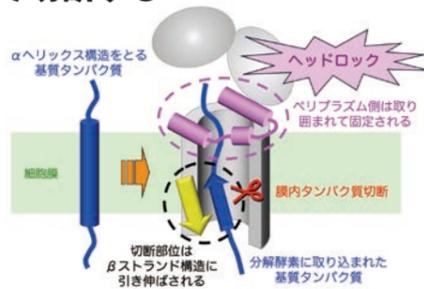


2025年3月21日

分解酵素は細胞膜の中でタンパク質をヘッドロックして切断する ~基質と結合した膜内タンパク質分解酵素の立体構造を解明~

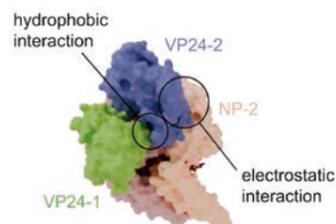
檜作洋平 助教・秋山芳展 教授らの研究グループは、禾兎和 准教授 (横浜市立大学) らの研究グループおよび大阪大学蛋白質研究所、東北大学との共同研究で、細胞膜の中で働く特殊なタンパク質分解酵素 RseP が基質となるタンパク質を結合した状態の立体構造を明らかにしました。本研究では、細菌の持つ膜内切断プロテアーゼである RseP を対象としてクライオ電子顕微鏡単粒子解析やネイティブ質量分析、部位特異的 in vivo 光架橋実験等に取り組み、RseP の内部に取り込まれた基質タンパク質が、しっかりと固定 (ヘッドロック) され、引き伸ばされた状態で切断されることを明らかにしました。切断の仕組みを詳しく調べていくことで、将来的には、病原菌の感染や増殖を抑えるような感染症治療薬や予防薬の開発につながる事が期待されます。

[DOI] <https://doi.org/10.1126/sciadv.adu0925>



2025年3月11日

エボラウイルスのヌクレオカプシドの構造を決定:VP24によるヌクレオカプシドの機能制御機構を解明



野田岳志 教授、杉田征彦 准教授らの研究グループは、高松由基 准教授 (長崎大学) らと共同で、ウイルスの内部構造を高精度で観察できる最新の電子顕微鏡技術を使用して、エボラウイルスの「中核」をなす生体分子複合体ヌクレオカプシドの構造を明らかにしました。さらに、ヌクレオカプシド構成タンパク質であるVP24がウイルス増殖を制御する仕組みの一端を明らかにしました。本成果は、エボラウイルスの増殖メカニズムの理解を大きく進めるだけでなく、ウイルスの増殖を阻害する治療薬の開発に役立つものと期待されます。

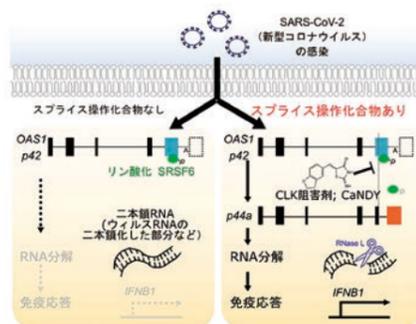
[DOI] <https://doi.org/10.1038/s41467-025-57236-4>

2025年3月5日

RNAスプライシング制御によるCOVID-19重症化リスクの低減

野田岳志 教授、萩原正敏 教授 (京都大学医学研究科、研究当時) らの研究グループは、COVID-19の重症化にかかわるSNPsのうち、2'-5'-オリゴアデニル酸合成酵素1 (oligoadenylate synthetase 1, OAS1) をコードする遺伝子座に存在するSNPに注目し、RNAスプライシングの変化が重症化リスクに関与するメカニズムを調査しました。この結果、COVID-19の重症化リスクを持つ人々でも、RNAスプライシングを制御する化合物を用いることで、新型コロナウイルスのヒト細胞への感染を低減できることを示しました。これにより、COVID-19に対する遺伝的脆弱性を持つ人々に対して、新たな治療法の可能性が示唆されました。

[DOI] <https://doi.org/10.1186/s12915-025-02173-3>



Seminars at LiMe

当研究所で開催したセミナーをご紹介します

2025年5月21日 (水) 13:00~

[Multimodal ECM セミナー] 腱細胞力学応答と細胞内・細胞外の力との関係

医生物学研究所 1号館1階会議室 (134室)

演者: 前田 英次郎 准教授

名古屋大学大学院工学研究科機械システム工学専攻

2025年5月9日 (金) 13:30~14:30

[14th nanobiofluids seminar] Prediction of hematopoietic stem cell diversity using quantitative phase imaging

医生物学研究所 医研1号館1階会議室 (134室)

演者: Takao Yogo, M.D., Ph.D.

Researcher: Division of Cell Regulation

The Institute of Medical Science, The University of Tokyo

2025年4月11日 (金) 10:30~11:30

[13th nanobiofluids seminar] Unconventional Nano-Biophotonic Tools For Imaging and Sensing Applications

医生物学研究所 2号館1階セミナー室 (104室)

Seminar Room (Room 104), 1st Floor, Bldg. No.2

演者: Aniruddha Ray, Ph.D. Associate Professor

Department of Physics and Astronomy, University of Toledo, Ohio.

2025年4月16日 (水) 15:00~16:30

[Theoretical Biology Seminar] Nutri-developmental biology: Impacts of nutrition histories in juvenile stages on growth, organogenesis, and lifespan.

医生物学研究所 2号館1階セミナー室 (104室)

演者: Tadashi Uemura

Graduate School of Biostudies and Center for Living Systems Information Science (CeLiSIS), Kyoto University

2025年4月14日 (月) 11:00~12:00

[2nd mechanosensory physiology seminar] ARDSにおける食道バルーンから測定されるLung stressにおける現技術の限界点および今後の展望

医研2号館 2階セミナー室 (211室)

演者: 前澤貴先生

大阪大学 医学系研究科

生体統御医学講座麻酔集中治療医学教室

2025年4月9日 (水) 16:00~17:30

[Immunology Seminar] Building Polymorphonuclear Cells

医研1号館1階会議室 (134室)

演者: Distinguished Professor Cornelis Murre

Dept. Molecular Biology, School of Biological Sciences, University of California San Diego, U.S.A

2025年4月3日 (木) 10:30-11:30

[12th nanobiofluids seminar] Mechanogenetics: toward an understanding of organ-specific gene regulation

医研1号館 1階セミナー室 (119) 室 (Zoomでのハイブリッド開催)

演者: Shintaro Yamada, PhD

Chief researcher

Genome Dynamics Project, Tokyo Metropolitan Institute of Medical Science

2024年3月14日 (金) 16:30~17:30

[1st PR2 seminar] Design of an Artificial Peptide Inspired by Transmembrane Mitochondrial Protein for Escorting Exogenous DNA into the Mitochondria

南部総合研究1号館1階共同セミナー室1

Shared Seminar Room 1, 1st Floor, Bldg. No. 1

演者: Naoto Yoshinaga, Ph.D.

SPDR, Biomacromolecule Research Team, RIKEN Center for Sustainable Resource Science Assistant Professor, Institute for Advanced Biosciences, Keio University

今後の予定

京都大学医生物学研究所 第19回公開講演会を下記のとおり開催します。
たくさんのご参加お待ちしております。

ウイルス・幹細胞システム医生物学共同研究拠点

京都大学医生物学研究所

第19回 公開講演会

感じる私・考える私・変化する私
～脳神経科学研究の現在～

「私はどうしてこのように感じるのか?」「私はどうしてこのように考えるのか?」
そして「私はどうして成長できるのか?」
皆さんは不思議に思ったことはありませんか?
近年の脳神経科学研究により、この人類の身近かつ根源的な問いが解かれつつあります。
講演では、感覚神経や、脳のでき方や高次脳機能の研究者が最新の知見を紹介します。

2025年
7月5日(土)

会場
京都大学百周年時計台記念館
百周年記念ホール

14:00～16:10 (開場 13:30)

14:05～15:05
「力を感じするしくみ」が支える体の機能
野々村 恵子
(医生物学研究所 教授)

15:10～16:10
脳の設計図と変化する脳
今吉 格
(生命科学研究所 教授、医生物学研究所 教授)

お問い合わせ先
京都大学医生物学研究所総務掛
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53

075-751-3802
330seminar@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
<https://www.infront.kyoto-u.ac.jp/>

京都大学

入場無料
定員500名
(先着順)



京都大学



ウイルス・幹細胞システム医生物学共同研究拠点

News Letter Vol.10 2025年7月3日発行

発行：京都大学 医生物学研究所 共同利用・共同研究拠点推進ユニット

<https://www.infront.kyoto-u.ac.jp/kyoten/>